

複式ならではのハプニング あれこれ

これは危険！

1 理科の指導(特に高学年)は、実験が重なってしまうことが多く、アルコールランプ等の使用など、危険を感じる場合があり、安全配慮が必要であった。

そんなとき...

実験をしない学年にVTR教材等の視聴を取り入れ対応している。

一方の学年を他教科のテスト等にして、事故防止に努めた。

実験等危険が予想される内容の時だけ、教頭先生に一方の授業を指導してもらった。

これは困った！

2 互いの学年が同時に発言し合うと、声が重なり合って響き、発言内容を聞き取りにくく、戸惑ったことがある。

そんなとき...

発言するタイミングをずらす学習過程を工夫している。

音読は、廊下に出てやっている。

3 できた課題を児童が前へ出て発表する際に、答えが間違っているにもかかわらず、全員の児童が気づかず授業が進んでいた。

そんなとき...

教師も反対側の学年の指導についていて気付かなかった。「わたって」いても、同時に両方の学年の様子を見届けるという姿勢が大切である。

1
案外、戸惑ったのは先生だけで、児童たちは慣れていて、自分たちの学習に集中できていたりします。

「同時間接指導」という型もあります。何でも自分が教えなくては...という意識が強すぎると、1時間中、両学年に「わたって」しゃべり続けてしまい、見えないことが多くなります。

複式の先生の戸惑い...

4 複式学級指導に慣れていない児童や1年生の場合、教師が他方の学年の指導をしているときも質問してきたり、話し掛けてきたりすることがあったので戸惑った。

そんなとき...

1学期当初の指導として

自分の側に教師がいないうちは声を掛けないことを指導した。また、教師がいないうちはどうするかの約束を決めたり、自分たちで学習するパターンを指導したりすることで、自学自習ができる体制を整えることに心掛けてきた。

5 1、2年生の複式学級では、どうしても1年生の指導に時間が掛かってしまい、指導のバランスが取れない。

そんなとき...

互いの学年の児童が教え合ったり、一緒に学んだりする時間を意識的に設けた。また、学習訓練として、教師がいないうちは何をやるか、課題が早く終わったときはどうするのか、ということ指導した。

1
複式学級の指導においては、ルールが大切です。学習、生活、当番活動など様々なルールが決められますが、児童が自分たちで決めて守ったり、全員できるようになったらルールから外したりする工夫も考えられます。

こんなこともあるの？

6 下学年を前時の復習から始め、上学年を本時の導入から始めるように計画していたら、復習に思わぬ時間が掛かってしまった。わたりがタイミングよく進められずに困った。

そんなとき...

復習から入る学年の問題量と難度に気を付けて、10分以内で解決できる程度にしておく。(前時の児童の様子をしっかりと把握しておけば大丈夫!!)

7 指導中、児童から「これ、去年もう習いました。」と言われた。

そんなとき...

慌てて既習事項の確認を行ったところ、A・B年度方式で計画していた内容が明確に分けられていなかった。引継ぎを含め、しっかりとした確認が大切である。

8 前年度に複式を組んでいた上学年の学習内容を覚えていて、予習ができていた状態だったことに驚いた。

そんなとき...

下学年の児童は上学年の活動に憧れを抱いてよく見ている。間接指導中、自分の活動に集中して取り組ませるためには、問題の難易度・分量をよく考え、周到な準備に心掛ける。

これこそ複式のよさ？門前の小僧習わぬ経を読む...ですね。「繰り返して学ぶことができるね。」などと言いながら、機転を利かして、実態に応じた指導になるよう対応しましょう。

よい授業とは、「わたり」が計画通りできた授業ではなく、本時のねらいを一人一人の児童がきちんと達成できた授業です。形にこだわることなく、内容にこだわりを・・・キーワードは臨機応変！

9 学年の逆転現象について

上学年よりも下学年の児童の方がよく指示を聞けたり、活動的であったりする場合がある。特に1・2年の学級の1学期は、入門期の1年生にじっくり目を向けることができずに困る。

そんなとき...

上学年の児童に声を掛けることにより下学年の自主性が育つ場面もある。上学年から教わるという機会はありませんが、どんな小さなことでも上学年がリーダーになれる機会を見逃さない。全校での活動で、他の学級から学ぶことも多くある。

10 教育機器・IT機器の使用など間接指導の際に、子どもたちが互いに音読を録音し合う活動を取り入れた。しかし、録音機器の基本操作を十分に理解できていないために、録音できなかった。

そんなとき...

普段から操作方法に十分に慣れておいたり、新しいものはきちんと指導する必要がある。

小集団においては、学力差や発達の段階の差を個人差と捉え、一人一人にどのように関わるかが重要です。

本来なら...と諦めないで、現状をどう改善していくか考えることが、複式学級を担当する者としてのやりがいです。

11 人数が少ないと、欠席児童がいたときに学習を進めるかどうかで迷う。

そんなとき...

極力全員で学習が進められるよう計画を見直して進めた。普段から、なるべく学習の進度が遅れないように気を付けている。

12 配慮を要する児童の間接指導時の支援で悩んでいる。

そんなとき...

ヒントカードやグループ学習等を取り入れ、児童が一人で悩むことがないよう工夫した。